

# 緑のまきば

1999 No. 31

小金井緑町教会  
 小金井市緑町四一六三三  
 電話〇四二三八一七九六一  
 編集・牧師 山畑 謙

## 教 説

### 『後ろのものを忘れ』

山畑 謙

「兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。」 (フィリピ三・一三―一四)

詩編四〇篇に「神は人に不思議な業を成し遂げられる。罪の代償を何も求めずに、ただ耳を開いて下さった」と歌われています。私たちのキリストとの出会いのほまりは実に様々です。まじめに求道した人もあればキリスト教文学や音楽・美術に惹かれてという人もあります。生まれながらにして教会で育った人もあり、中には純な動機で自嘲気味に回顧する人もあるでしょう。いずれにしても、そこに自分本位な思惑があったとしても、それでもなおその中に神の不思議な業が与えられます。その時、耳開かれてキリストと出会うのです。

使徒パウロは、元々キリスト教徒迫害の最先鋒にいた人で、彼もまさに神の不思議な業としてキリストとの出会いを与えられました。迫害のための旅の途上、突然キリストからの呼びかけを受け、キリストに出会った。その時「後ろのもの」の意味と価値が逆転してしまします。後ろのものとは、過去に自分が築き上げてきた業績や誇りです。育ちも学歴も業績も、すべてが完全な者（義）となるために有利なものでした。ところが十字架にある主イエスの愛ときよさに直面した時、それら後ろのもの一切がどん欲と傲慢にまみれた恥辱のかたまりとなっていました。

人を赦し生かすために、その罪の罰を身代わりになって負う主イエスの自己犠牲の純粋性、きよさの前に、自分が正しいと思ってやってきた事の背後に他者を犠牲にして自分を喜ばせ満ちそうとする汚れたどん欲が潜んでいる事に気付かされたのです。それを知ってしまう事は、大変な恐怖でした。しかし、それを直視させたのは、主の十字架の犠牲が他ならぬこの自分のためであり、自分が愛されているのだという事を知ったからでした。

かつてどうしようもない背きの故にバビロン捕囚というどん底にあったイスラエルの民も、次のように神に呼びかけられました。「私の僕、私の選んだ者、私の愛する友の子らよ。私はあなたを固くとらえて言った。あなたは私の僕、私はあなたを選び、決して見捨てない。恐れることはない、私はあなたと共にいる神。勢力を与えてあなたを助け、私の救いの右の手であなたを支える。」(イザヤ書四一章)と。

主イエスは十字架に流された血潮をもって、過去のすべての罪を洗いきよめ、その呪縛から解き放って下さいました。かつては「後ろのもの」に囚われていたが、主イエスに出会い、その愛に捕らわれるものとなったのです。私たちは未だ不完全な者で、目標に向かう途上にあります。そこでは「後ろのもの」が再び私たちをとらえようとして迫ります。傲慢が芽を出してきます。逆に、信仰生活をするほどに自分の汚れが目についてならなくなり、それにとらわれて主の犠牲が誰のためであったかも忘れて、神を差し置いて自分で自分を裁いてばかりの誤った自己卑下に陥る事もあります。この二つは表裏一体のもので、神は再び不思議な業を私たちにして下さるでしょう。「後ろのもの」に再び囚われそうになる時に、きつと耳を開いて下さいます。その時、復活の主イエスから今一度「私があなたを選んだ。決して見捨てない。恐れることはない。私はあなたと共にいる」と聞くでしょう。それがすなわち、キリスト・イエスに捕らえられているという事ではありませんか。「後ろのもの」の囚われから解き放たれる時、本当に後ろのものを忘れて前にむかってひたすら走ることが出来るのです。共にひたすら走ろうではありませんか。